

現代通訳者考
—コミック、ドラマを中心として—

柴原 早苗
(放送通訳者)

翻訳者や通訳者が小説の主人公になることは、そう頻繁には見られない。数年前、ニコール・キッドマン主演の映画 *The Interpreter* (邦題「ザ・インタープリター」) で同時通訳者が描かれているが、日本のフィクションではどうなっているのだろうか。そんな疑問を抱きながら、いくつか私なりに集めてみた。本エッセイでは日本のドラマとコミックを中心に、通訳者がどのように描写されているかをまとめてみる。

1. 書籍情報: 「大使閣下の料理人 1」
著者: 西村ミツル(原作)、かわすみひろし(漫画)
出版社: 講談社漫画文庫
出版年: 2004 年
頁数: 456
ISBN: 4-06-360784-4 (文庫)

本書はコミック誌「モーニング」に 1998 年から 2002 年まで連載されていたもので、大使公邸の料理人、西村ミツル氏の実話をもとに展開されている。文庫版は全 13 巻。第 1 巻はハノイの在ベトナム大使館が舞台。外務省専門職員の古田誠一はいわゆるノンキャリアの三等書記官であり、倉木大使の通訳業務を頻繁に行っている。

クライマックスは、大使がベトナムの大統領に「自助努力」という言葉を用いた際、古田が訳語に窮する場面である。ベトナム語には「努力」に該当する表現がない。このため、古田は‘no luc’と訳してしまう。しかし大統領はこれに激怒。日本とベトナム関係が危うくなるという状況にまでもつれてしまう。

‘no luc’は、教師が生徒に対し「もっとがんばりなさい」という意味であり、大統領は見下されたとばかり、ひどくプライドを傷つけられてしまったのである。責任を感じた古田は倉木大使に「このうちは辞表を書いておわびします！」と述べるが、大使は「我々の仕事の中には誤解を解くことも含まれている」と諭し、辞職を思いとどまらせる。そして再び大統領との会談の場が設けられたのである。

しかし、大使は再び「努力」という言葉を使う。古田はこれに一瞬戸惑うが、「先生と生徒のような関係ではなく、あくまでも対等な立場でこれからも技術と知恵を出しあって全力を尽くしあえればと思います」と訳す。これを聞いた大統領は大使に握手の手を差し伸べるのであった。

通訳者というのは、発話者の内容を漏らさず、追加編集せずに訳するのが仕事である。しかし、言語学的にみた場合、すべての言語において一対一の対等な訳語が存在するとは限らない。本書

では、「努力」という一言が目的言語においてわかりやすくなるよう、情報が大幅に追加されているのが読み取れる。

2. 書籍情報: 「月にキスの花束を1」

著者: 北川みゆき
出版社: 小学館
出版年: 2004年
頁数: 375
ISBN: 4-09-138837-X

本書は1996年、月刊マンガ雑誌「少女コミック Cheese!」誌上で連載されていた作品。全2巻からなる。主人公は19歳の女子大生、華原瞳。幼い頃に出会った少年が忘れられず、同姓同名の不良めいた少年、永月敦也に思いを寄せる。

敦也は目黒外語大学の学生。普段はバーでアルバイトをしているが、テレビ局に知人が番組スタッフとして働いていることから、週1回、番組で外国人ゲストの通訳もしている。物語の後半では、雑誌社から企画が上がり、あるジャーナリストの海外取材に1年以上同行し、通訳者として稼働するという任務が与えられている。瞳は敦也が元気である様子を、紙面上の「訳・永月敦也」の文字から推し量るのである。

物語はあくまでもラブストーリーなのだが、通訳者の描写に関しては少々補足したくなる箇所もあった。たとえば、テレビ局内である事件が発生した際、敦也は番組ゲストを本番終了後に殴ってしまう。しかし、現実の通訳界ではよほどのことがない限りこうした暴力沙汰はありえない。また、敦也本人が自分はまだ勉強中の身であると言ったにも関わらず、大物ジャーナリストの同行通訳者に抜擢されるというのも、かなり理想の世界での話だろう。雑誌記事に通訳者として名前が掲載されることも、実際にはほとんどないと言ってよい。

3. 書籍情報: 「ラブシャッフル」全2巻

著者: 野島伸司
出版社: 小学館文庫
出版年: 2009年
頁数: 316(第1巻)、318(第2巻)
ISBN: 978-4-09-408365-1(第1巻)、978-4-09-408375-0(第2巻)

2009年1月から3月までTBSで放映されていたドラマの完全シナリオ本。玉木宏主演のラブコメディで、平均9%近くの視聴率を獲得している。ストーリーは、男女4人がお互いのパートナーを1週間ごとに交換していくというものである。

本書で描かれている通訳者は、香里奈演じる逢沢愛瑠。父親を外交官に持ち、名刺には英語、フランス語、スペイン語の同時通訳者と書かれている。通訳シーンは2か所ある。

まずはテレビ局スタジオ。CNNニュースを同時通訳する場面で、仕事が終わると愛瑠はスタッ

フから「お疲れ様」と紙コップのコーヒーを差し出される。そこで携帯電話が鳴るという設定だ。

2 つ目も同じくニュースの同時通訳。プロデューサーとの間で反省会が行われているシーン。愛瑠が「もう少しニュートラルって言われても、不幸な事件をコメントしてるんですから、口調が厳しくなるのは当然じゃないですか」と述べると、プロデューサーは「君は通訳であって、キャスターじゃないんだよ」と反論する。これに対し愛瑠は「私は機械じゃないから感情だって出ます！」と反発してこのシーンは終了する。

放送通訳者としての私見を述べると、まず、業務終了後にスタッフがコーヒーを配ることはなく、プロデューサーとの反省会も存在しない。訳語の統一が必要なときと、よほどの誤訳の場合はフィードバックされるが、定期的な会合はなく、ましてやプロデューサーが通訳者に対し、「君はキャスターじゃない」などと言うことも起こり得ない。

今回は 3 作品を紹介したが、他にも映像翻訳者を描いたコミック「ハーフな分だけ」(星里もちる、小学館、1991 年)や、藤原紀香演じる同時通訳者が登場する NHK ドラマ「結婚のカタチ」(青柳祐美子脚本、2004 年放映)などもある。はからずも、イギリス Chartered Institute of Linguists が 2009 年 6 月に発行した会報 *The Linguist* では、「小説における通訳者・翻訳者の描写が与える影響」という内容の記事が掲載されていた。この中で著者の Daniel Pagoon は、「多くの作家は我々の業務を理解しておらず、通訳と翻訳の違いも把握できていない」「読者がこの業種をより良く理解するためには、作家の事前リサーチが不可欠である」と問題提起をしている。

日本語フィクションの世界においても、これは同様であろう。たとえば、「メモを全くとらずに通訳するシーン」や「一人称でなく三人称で訳し続ける通訳者」などは、現実ではありえない。通訳業に携わる者として、私たちの仕事をきちんと第三者に理解してもらえるような啓蒙活動も必要ではないかと私は考えている。

.....

【著者紹介】

柴原 早苗 (SHIBAHARA Sanae) ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス大学院修了。ロンドンの BBC ワールドにて放送通訳業に従事。帰国後は CNNj の放送通訳を始め、英語学習に関する指導・執筆業に携わる。現在、アルク「English Journal」で BBC News を監修の他、アルコム・ワールドにて「ヒアリング・クラブ学習コーチ」を務める。ESAC (英語学習アドバイザー)「プロフェッショナル・アドバイザー」。連絡先: Email: shiba@kd6.so-net.ne.jp

